みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

縦横無尽 タテとヨコ
色とかたちのフィールドワーク(4)：異形の織物

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉本, 忍
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5206

縦横無尽

タテとヨコ 色とかたちのフィールドワーク

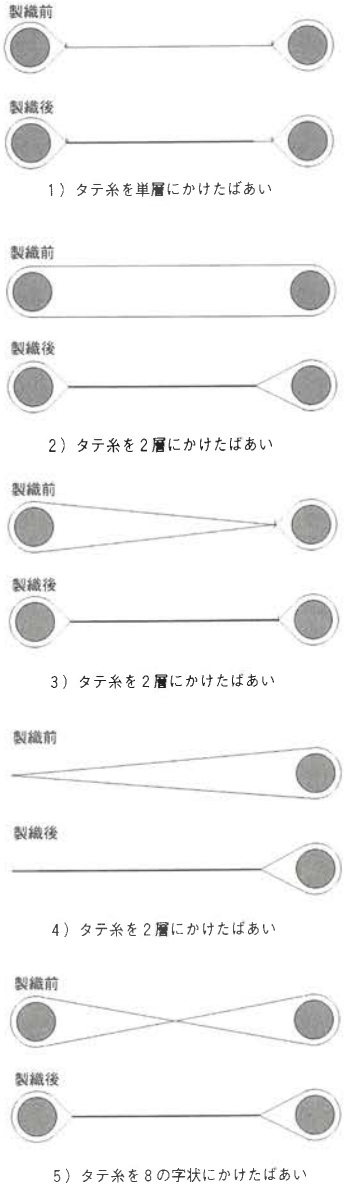
4 異形の織物

吉本 忍

衝撃的な形

織物の整経方式には、平整経式、輪状整経式、擬似輪状整経式、結節輪状整経式という4種類の整経方式がある。これまで3回の連載では、それらの整経方式の違いによって、織物の織りあがりのかたちには四角形のほかに、輪状を呈したものがあることについて述べてきた。したがって、織物の基本となるかたちは四角形と輪状である。ただし、世界各地で織られてきた織物のうちには、例外的なものが少なからず見いだされ、四角形の織物と輪状の織物以外にも、さまざまな異形の織物がある。わたしがそれらの存在を知ったときの驚きは、この連載をはじめるにあたって、268号で述べたインドネシアのティモール島で1970年に輪状の織物を見たときの驚きと同様に、きわめて衝撃的なものであった。

本号では、まず、四角形でもなく、輪状でもない織物のかたちが、どのようなものであるのかということを説明し、それらを織るための整経はいかなる方式によっているのか。どこで、誰が、何のためにつくっているのかという、基本的なことがらを紹介しておきたい。そして、次号以降で、それらの異形の織物を形状の違いごとにさらにくわしく紹介していくこととする。



1）タテ糸を単層にかけたばあい

2）タテ糸を2層にかけたばあい

3）タテ糸を2層にかけたばあい

4）タテ糸を2層にかけたばあい

5）タテ糸を8の字状にかけたばあい

平整経式のタテ糸のかけ方（製織前と製織後）

さまざまな形状

さて、それでは異形の織物とはいかなるかたちの織物であるのか。それらを異形と総称してしまえば、まさにそのとおりであるが、個々の形状を文字によって適切に表現することは、きわめてむつかしい。しかし、この連載では便宜的に、それらを「管状の織物」、「丸紐状の織物」、「枝状の織物」、「襞状の織物」、「楕円状の織物」として記述する。

管状、丸紐状、枝状、襞状、楕円状といった異形の織物を織るための準備作業としておこなわれる整経は、理論的には、平整経式、輪状整経式、擬似輪状整経式、結節輪状整経式のいずれもありうるが、これまでにあきらかになっている異形の織物の整経は、すべて平整経式のうちに包括される。ただし、整経が平整経式のばあいには、一般的には四角形の織物が織られていることから、異形の織物はいずれも平整経式の整経による例外的な織物として位置づけられる。なお、平整経式の整経は、わが国では腰機（いざり機）や高機による機織りの準備作業として、ごくあたりまえにおこなわれてきた。したがって、これまで平整経式の整経については、とくに説明をしてこなかったが、平整経式の整経では、タテ糸は一般に、1本、または2本の経糸保持具に、単層か2層、もしくは8の字状にかけられている。したがって、このばあいのタテ糸は、他の整経方式のように単一のかけ方に限定されることはないが、いずれのかけ方においても、機織りがおこなわれている状況

管状の織物（複製）

枝状の織物（ペルー）

丸紐状の織物（ペルー）

では、織られた布は単層に組織される。

それぞれの用途

インドネシアのティモール島で1970年に輪状の織物と出会ったのちに、わたしが四角形でもなく、輪状でもない異形の織物の存在をはじめて知ったのは、1970年代後半であった。ただし、それはフィールドワークの現場ではなく、1912年にオランダで出版されたJ.E.JasperとMas.Pirngadieの共著による“De Inlandsche Kunstnijverheid in Nederlandsch Indië II, De Weefkunst”（『蘭領インドの工芸 第2巻 織物工芸』）にあらわされた記述によるものであり、この書物において報告されていた異形の織物は、管状の織物であった。これは平織組織の織物で、インドネシアのジャワ島中部のブローラで20世紀前半ごろまで織られ、ランプの芯として使用されていた。ただし、実物資料については確認できていない。

丸紐状の織物は、南米のペルーのクスコ周辺に住むケチュア人のもとで織られている。この織物はタテ糸浮織技法による紋織物の一種で、紐の直径は3～6ミリ程度の細いものであり、おもにマントや袋などの縁飾りや女性の髪飾り、帽子の飾り紐などに使われている。

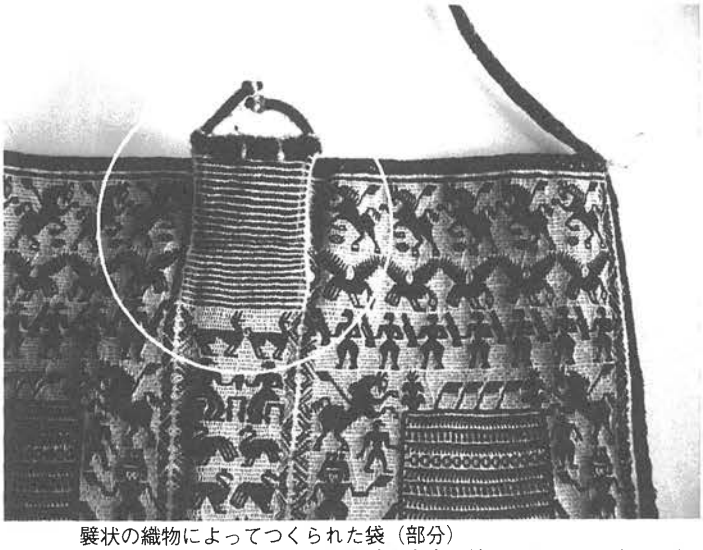
枝状の織物も丸紐状の織物と同様にペルーのクスコ周辺に住むケチュア人のもとで織られている。この織物は、細幅の四角形の織物（紐）が枝分かれ状を呈しているもので、織り幅が4～7ミリ程度の細いものは、女性の髪飾りや帽子の飾り紐としてもちいられており、幅が3センチ前後の比較的広幅のものは、おもに乳幼児を寝かせておくカゴをしばる飾り紐として使われている。なお、それらのうちには織り耳部分にビーズを織り込んだものも少なからず見いだされる。

襞状の織物は、ペルー、および、ボリビアに住むケチュア人、さらには、アフリカのカメルーンのメッタ人のもとで織られている。この織物は部分的に襞状に隆起、あるいは陥没した状態に織られたものである。織りあがった織物は、全体を二つ折りにして左右の重なった部分を縫いあわせて袋とし、襞状の部分も左右の端を縫いあわせて袋に付属したポケット状の小さな袋としている。

楕円状の織物としては、草鞋（わらじ）をはじめとする草履、および、投石紐がある。このうち草履は、日本をはじめ、朝鮮半島、中国、イランなどで織られてきた。また、投石紐は、わが国ではまったく知られていないが、世界の広範な地域で、武器、および、穀物の収穫時にスズメなどの害鳥を追い払うために使用されてきたもので、石をくるむ中央部分が楕円状の織物でつくられており、その両端に連なる紐は一般に編んでつくられている。

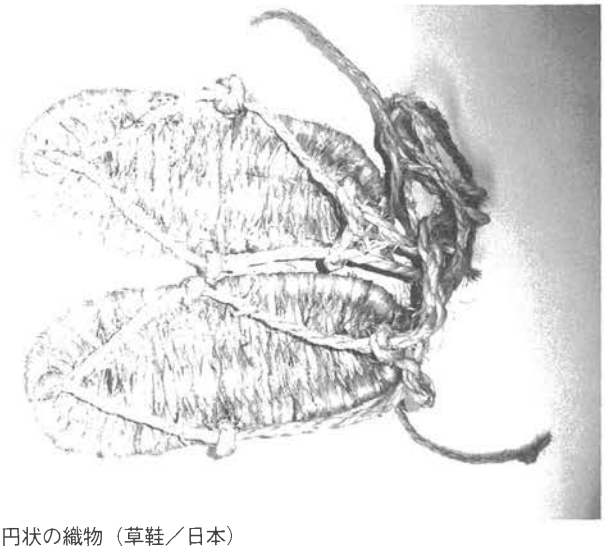
立体的織物

以上が、これまでにわたしが文献資料とフィールドワークによって確認している異形の織物である。管状の織物、丸紐状の織物、枝状の織物、襞状の織物、楕円状の織物として提示してきた異形の織物を、これまでの記述と写真から、すべてが織物であると納得していただくことはきわめてむつかしいと思われるし、読者のなかには、わたしが異形の織物として提示したものは、織物ではなくて編物ではないのかと考えられる向きもあると思わ

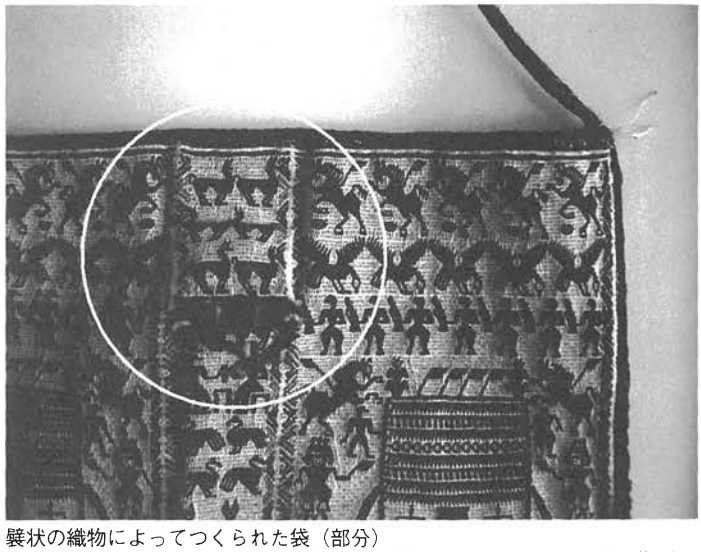


嚢状の織物によってつくられた袋（部分）
○で囲んだ部分では、隆起した嚢の左右を縫いあわせてつくられたポケット状の袋がはねあげた状態となっている

嚢状の織物によってつくられた袋（ボリビア）



楕円状の織物（草鞋／日本）



嚢状の織物によってつくられた袋（部分）
○で囲んだ部分では、隆起した嚢の左右を縫いあわせてポケット状の袋がつくられている

楕円状の織物（投石紐／ペルー）

れる。しかし、これらはいずれもわたしがこれまでに提示している織物の基本概念（織物とは、糸、あるいは糸に類する線状物を経糸と緯糸とし、あらかじめ直線的に配置され、張力を備えている経糸に対して、緯糸を直線的に交叉させることによって組織された製品である）に準拠したものである。また、異形の織物は、いずれもサイズは小さいものの楕円状の織物以外はあきらかに立体的な織物である。したがって、それらの存在は、織物を平面体として理解してきたこれまでの常識をくつがえすものといえ、それらのうちには、20世紀に出現したファイバー・アートの原点ともいえる超常的な造形性がうかがわれる。

（国立民族学博物館 民族文化研究部 教授／よしもと・しのぶ）